

日蓮大聖人御書全集

おうしやじょうじ

王舎城事

新版
1545
ゝ
1548

おうしやじようじ

王舎城事

ぶんえい

ねん

文永12年（'75）

がつ

にち

4月12日

54歳

さい

四条金吾

しじようきんご

ぜにいつかんごひやくもん

た

そうら

お

銭一貫五百文、給び候い畢わんぬ。

しょうぼう

くわ

うけたまわ

そうろう

よろこ

い

そうろう

焼亡のこと委しく承り候こと、悦び入って候。

たいか

にんのうきよう

しちなん

なか

だいさん

かなん

ほけきよう

大火のことは、仁王経の七難の中の第三の火難、法華経の

しちなん

なか

だいいち

かなん

七難の中には第一の火難なり。

そ

こくう

つるぎ

切

みず

ひや

夫れ、虚空をば剣にてきることなし。水をば火烧くこと

しょうにん

けんじん

ふくにん

ちしや

ひ焼

なし。聖人・賢人・福人・智者をば火やくことなし。例せ

がつし

おうしやじよう

もう

だいじよう

ざいけくおくまんけ

しちど

ば、月氏に王舎城と申す大城は、在家九億万家なり。七度

まで大火おこりてやけほろびき。たいか 焼 滅 万民なげきて逃亡せんばんみん 歎 どうぼう

せしに、大王なげかせ給うことかぎりなし。だいおう たも その時、賢人あとき けんじん

りて云わく「七難の大火と申すことは、聖人のさり、王のい しちなん たいか もう しょうにん 去 おう

福の尽くる時おこり候なり。ふく っ とき そうろう しかるに、この大火、万民を

ばやくといえども、内裏には火ちかづくことなし。焼 だいら ひ 近 し 知んぬ、

王のとがにはあらず。おう 失 ばんみん とが 万民の失なり。されば、万民の家を

王舎と号せば、火神、名におそれてやくべからず」おうしや かいん な 恐 焼 と申せ

しかば、さるへんもとて、王舎城とぞなづけられしかば、辺 おうしやじよう 名

それより火災とどまりぬ。されば、大果報の人をば大火はやかさい 止 だいかほう ひと たいか 焼

かざるなり。

こくおう

焼

し

にほんこく

かほう

付

これは国王すでにやけぬ。知んぬ、日本国の果報のつく

徴

くに

だいほうぼう

そうとう

ごうじよう

るしるしなり。しかるに、この国は、大謗法の僧等が強盛

祈

にちれん

ごうぶく

ゆえ

にいのりをなして日蓮を降伏せんとする故に、いよいよ

災

きた

うえ

な

もう

たい

あらわ

そうろう

わざわい来るにや。その上、名と申すことは体を顕し候

りようかぼう

もう

ほうぼう

しょうにん

かまくらじゅう

じようげ

し

に、両火房と申す謗法の聖人、鎌倉中の上下の師なり。

いっか

み

とど

ごくらくじや

じごくじ

一火は身に留まりて、極楽寺焼けて地獄寺となりぬ。また

いっか

かまくら

放

ごしよ焼

そうら

いっか

げんぜ

一火は鎌倉にはなちて、御所やけ候いぬ。また一火は現世

くに

うえ

にほんこく

してい

むけんじごく

お

の国をやきぬる上に、日本国の師弟ともに無間地獄に堕ち

て、阿鼻あびの炎ほのおにもえ候そうろうべき先表せんぴようなり。愚癡ぐちの法師ほつしとう等が

ちえちえものものもうもうもちもちそうらそうらていていそうろうそうろう

智慧ある者の申すことを用い候わぬは、これ体に候なり。

ふびんふびんさきざきおんふみさきざきおんふみそうらそうら

不便、不便。先々御文まいらせ候いしなり。

おんまおんまそうらそうら

御馬のがいて候えば、またともびきして、くり毛げなる馬うま

そうらそうら

をこそもうけて候え。あわれ、あわれ、見みせまいらせ候わ

そうらそうら

ばや。

なごえなごえ

名越のことは、これにこそ多くの子細しさいどもをば聞きこえて

そうらそうらひとひと行行遭遭

候え。ある人のゆきあいて、理具りぐの法門ほうもん自讃じさんしけるを、

散散々々責責そうらそうらうけたまわうけたまわそうろうそうろう

さんざんにせめて候いけると承り候。

にようぼう

おん 祈

ほけきよう

うたが

また女房の御いのりのこと、法華経をば疑いまいらせ

そうら

ごしんじん

弱

たま

によほう

候わねども、御信心やよわくわたらせ給わんずらん。如法

しん

ひとびと

まこと

に信じたるようなる人々も、実にはさもなきこととも、こ

み

そうろう

し

そうろう

によにん

れにて見て候。それにも知ろしめされて候。まして女人

みこころ

かせ

繫

取

おん

かな

そうら

の御心、風をばつなぐともとりがたし。御いのりの叶い候

ゆみ

強

弦

弱

たち

剣

わざらんは、弓のつよくしてつるよわく、太刀・つるぎに

使

ひと

おくびよう

ほけきよう

てつかう人の臆病なるようにて候べし。あえて法華経の

おん 失

そうろう

ねんぶつ

じさい

われ

御とがにては候べからず。よくよく念仏と持斎とを我も

捨

ひと

ちから

塞

たま

たと

すて、人をも力のあらんほどはせかせ給え。譬えば

さえもんどの

ひと

憎

おんものがた

左衛門殿の人にくまるるがごとしと、こまごまと御物語

そうら

ほけきよう

ごしんよう

ほけきよう

敵

り候え。いかに法華経を御信用ありとも、法華経のかたき

遊女

思

を、とわりほどにはよもおぼさじとなり。

いっさい

ふぼ

背

こくおう

従

ふこう

一切のことは、父母にそむき国王にしたがわざれば、不孝

もの

てん

責

被

ほけきよう

敵

の者にして天のせめをこうぶる。ただし、法華経のかたきに

ふぼ

こくしゆ

もち

こうよう

なりぬれば、父母・国主のことをも用いざるが、孝養とも

くに

おん

ほう

そうろう

なり、国の恩を報ずるにて候。

にちれん

きようもん

みそうら

ふぼて

摺

されば、日蓮はこの経文を見候いしかば、父母手をすり

制

し

そうら

ひと

勘

当

てせいせしかども、師にて候いし人かんだうせしかども、

かまくらどの ごかんき にど

被

くび

鎌倉殿の御勘気を二度までかぼり、すでに頸となりしかど

恐

そうら

いま

にほんこく

ひとびと

どうり

も、ついにおそれずして候えば、今は日本国の人々も道理

もう

辺

にほんこく

こくしゅ

ふぼ

ししやう

もう

かと申すへんもあるやらん。日本国に国主・父母・師匠の申

もち

てん

助

被

ひと

にちれん

すことを用いずして、ついに天のたすけをかぼる人は、日蓮

ほか

い

そうら

のち

ごらん

より外は出だしがたくや候わんずらん。これより後も御覧

にちれん

謗

ほっしばら

にほんこく

いの

くにほろ

あれ。日蓮をそしる法師原が日本国を祈らば、いよいよ国亡

けっく

責

おも

とき

かみいちにん

しもばんみん

ぶべし。結句、せめの重からん時、上一人より下万民まで、

髻

分

奴

臍

食

例

もとどりをわかつやつことなり、ほぞをくうためしあるべ

ごしやう

こんじやう

ほけきやう

かたき

ひと

し。後生はさておきぬ、今生に法華經の敵となりし人を

ぼんてん

たいしやく

にちがつ

してんぼつ

たま

みなひと

見懲

ば梵天・帝釈・日月・四天罰し給いて、皆人にみこりさせ

たま

もう

そうろう

にちれん

ほけきよう

ぎようじや

給えと申しつけて候。日蓮、法華經の行者にてあるなし

ごらん

は、これにて御覽あるべし。

もう

こくしゆとう

ほつし

脅

おも

こう申せば、国主等はこの法師のおどすと思えるか。あ

憎

もう

だいじだいひ

ちから

むけんじごく

だいく

えてにくみては申さず。大慈大悲の力、無間地獄の大苦を

こんじよう

消

しょうあんだいしい

かれ

あく

今生にけさしめんとなり。章安大師云わく「彼がために悪

のぞ

すなわ

かれ

おや

とううんぬん

もう

こくしゆ

を除くは、即ちこれ彼が親なり」等云々。こう申すは、国主

ふぼ

いつさいしゆじよう

しししよう

ことごととお

そうら

とど

そうら

の父母、一切衆生の師匠なり。事々多く候えども、留め候

いぬ。

また麦むぎの白米はくまい一だ、
はじかみ送り給たび候そうらい畢おわんぬ。

うづきじゆうににち

卯月十二日

日蓮にちれん 花押かおう

しじょうきんごどのごへんじ
四条金吾殿御返事